

【担当者名】○橋本竜作 hashi-ryu@hoku-iryo-u.ac.jp

太田 亨 才川悦子 下村敦司 田村 至 中川賀嗣 榊原健一 永見慎輔
 福田真二 飯泉智子 小林健史 前田秀彦 柳田早織 葛西聡子 辻村礼央奈
 若松千裕

【概要】

基礎および専門科目で身につけた知識・技術を統合し、臨床実習指導者の指示の下で各種障害に対する言語聴覚療法を実習し、言語聴覚療法全般および医療人としての態度・行動について学ぶ。

【学修目標】

言語聴覚士としての適切な態度と行動をとりながら、これまで習得した知識と技術を実際の施設で活用するために、一連の言語聴覚療法を臨床実習指導者の指示のもと実施することができる。

1. 患者が抱える音声、言語、聴覚、摂食・嚥下に関する問題の解決を図るために、一連の診療（補助）行為・リハビリテーション医療の流れを理解できる。
2. 患者の評価・訓練にあたり、必要な情報を収集し、それらと音声、言語、聴覚、摂食・嚥下の問題との関連性を考えることができる。
3. 患者の特性に適った評価方法を選択し、それを適切に実施し、結果の解釈ができる。
4. 患者の評価と方針に基づいて、訓練・指導の提案と内容の実施ができる。
5. 必要かつ適切な記録と報告（口頭および書面）ができる。
6. 医療職業人として適切な態度と行動ができる。

【学修内容】

回	テーマ	授業内容および学修課題	担当者
	臨床観察	臨床観察は、評価と治療にとって基本的な技術である。実習では、担当患者だけでなく、多様な患者を観察する機会を多く持つ。観察した事象は、見たまま・聞いたままに適切な用語を用いて記録をする。観察した事象（事実）と解釈（意見）を区別して記載する。	臨床実習指導者 （全担当教員）
	評価・訓練に関する実習	【評価】検査の目的を理解した上で、適切な評価方法を選択し、実施する。評価結果を適切に解釈し、問題点を把握する。 【訓練】問題点に沿った解決方法を考え、適切な目標設定をする。訓練の目的や一般的適応を理解した上で、適切な訓練方法を提案し、十分な準備の上で実施する。患者の反応や訓練経過から問題点を挙げ、治療効果や工夫の必要性について説明する。	臨床実習指導者 （全担当教員）
	症例研究・評価報告の作成	適切な用語で記録をする。誤字・脱字がなく簡潔かつ適切に文章表現をする。個人情報の記載について、匿名性などに留意した対応をする。	臨床実習指導者 （全担当教員）

【授業実施形態】

面接授業

授業実施形態は、各学部（研究科）、学校の授業実施方針による

【評価方法】

実習終了後に提出された「臨床実習指導者評価」、「成果物」（実習日誌、症例報告書、実習報告書など）、セミナー発表内容などにより総合的に判断する。

【教科書】

「実習の手引き」・北海道医療大学言語聴覚療法学科 編

【参考書】

適宜、紹介する。

【備考】

基礎実習の単位を修得していることが必要である。

【学修の準備】

「実習の手引き」における「課題の進め方」を理解し、実習の準備を行うこと。

【ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）との関連】

（DP1）生命の尊厳と人権の尊重を基本とした幅広い教養、豊かな人間性、高い倫理観と優れたコミュニケーション能力を身につけている。

（DP2）最新のリハビリテーション科学を理解し、保健・医療・福祉をはじめとするさまざまな分野において科学的根拠を有する専門技術を提供できる能力を身につけている。

（DP3）言語聴覚士として必要な科学的知識や技術を備え、心身に障害を有する人、障害の発生が予測される人、さらにはそれらの人々が営む生活に対して、地域包括ケアの視点から適切に対処できる実践的能力を身につけている。

（DP4）関係職種と連携し、質の高いチーム医療の実践的能力を身につけている。

（DP6）社会の変化や科学技術の進歩に対応できるよう、常に専門領域の検証と、積極的な自己研鑽および言語聴覚療法科学の開発を実践できる能力を身につけている。

【実務経験】

田村 至 永見慎輔 飯泉智子 葛西聡子 小林健史 前田秀彦 柳田早織 辻村礼央奈 若松千裕 （言語聴覚士）

太田 亨 中川賀嗣 才川悦子（医師）

橋本竜作（公認心理師）

【実務経験を活かした教育内容】

医療機関での経験を活かし、総合実習における言語聴覚士としての実践力の養成を目指す教育を行う。

（言語聴覚士、医師、公認心理師）